

太宰府の文化財

331

宝満山の領域観

宝満山と人との関わりは、考古学的には7世紀後半ごろからと考えられ、以来1300年の間に山の空間構成は時代の趨勢とともに変化してきました。明治時代に神社神道

による管理になる以前の宝満山の姿を文献から検討してみると、当地域における山の位置付けについては、江戸時代前期に編纂された『筑前国統風土記』によれば「竈門山

あり、明治時代初期に編纂された『福岡県地理全誌』によれば「内山村(中略)竈門山 村の東にあり。南は本道寺、大石、西は此村、及び北谷、四村に亘れり。」とあり、現在の太宰府市大字内山、北谷、筑紫野市大字原、大石、本道寺、柚須原、香園あたりがその範囲として認識されていました。



▲宝満山頂(左側)と仏頂山(右側)



▲宝満山遠景(筑紫野市より)

筑紫の国の惣鎮守と称す。凡国土には鎮守となれる山あり。」とされ、まさにこの地域を代表する霊山として位置付けられています。山の領域については、江戸時代後期の『筑前国統風土記附録』によれば「竈門山 此山は御笠郡の北にありて内山、北谷、原大石、本道寺、香園、柚須原すへて七村に亘れり」と

また『筑前国統風土記』によれば「小岳社 或愛嶽の字を用ゆ。竈門山よりひくして小なれば、大岳に対して、小岳と云ふなるへし。大石村の上なる山也。(中略)宝満山の財行坊を以て社僧とす。故に宝満よりは是を預れり。今も此神をたふとひて、此山に参詣の人たへす。」「佛頂山 竈門山の次、北にある山也。竈門山より高し。かまとの奥の院と称す。開山心蓮上人が墓、山のいたたきにあり。とあり、宝満山頂の南北にある愛嶽山、仏頂山の2峰までが宝満山の信仰に関連する領域であったとされています。

その中でさらに信仰に深く係わる領域としては、江戸前期の『竈門山旧記』では「惣而内山、北谷、南谷、中堂を山の頂まで竈門山と申也。中古山下の衆徒退転して、或は北谷、内山、原山三カ郷村と成。」と、中世以前の旧跡の情報に重きが置かれています。しかし、江戸後期の『筑前国統風土記拾遺』では「南谷、北谷に坊舎の跡あり。南谷は有智山村に属し、北谷は北谷村に属す。其中間の高き所を中堂原といふ。地形竈門山を負りし址とて大きな礎石あり。

草堂に薬師十二神像を安置す。」と記す一方で、「山徒漸く天台教を崇む。台徒年を逐て繁昌し有智山寺に居あまりて四所の伽藍にも会集せり。四所の伽藍と云は、東伽藍は提谷に跡あり。油須原村本道寺村より登る道なり。西伽藍は休堂の下一町許内山村の方にあり。南伽藍は大石村大行寺原より登る道なり。北伽藍は佛頂山の良化生童子といふ行場に在。東の谷を越て穂波郡山口村の内荒谷より登る道なり。」とし、山中の「四所の伽藍」が領域の領域観を象徴するものとして描かれています。この領域に近い範囲は、近世宝満二十五坊中の井本坊が伝えている『竈門山水帳』(井本文書)に添付された図に具体的に見ることが出来ます。

太宰府の文化財

332

坂本ムラカタの集落景観

坂本三丁目・大字坂本

坂本ムラカタは四王寺（四王院）があった四王寺山（大城山）の南麓に位置し、大宰府関連史跡のひとつである「観世音寺境内及び子院跡」内にあたります。村の名前は、四

王寺に参詣する人々の登山口であることから坂本といわれるようになったと『筑前国続風土記拾遺』(江戸時代後期)には記されています。坂本はマチカタとムラカタ

に分かれていて、ムラカタが坂本の本村にあたり、元

寇のときに戦うために来た武士が住み着いたと伝えられています。中世のようすはわかっていませんが、江戸時代以降は農村集落として現在に続いてきています。坂本ムラカタの集落景観はそのような歴史を背景に地形・地貌と住まってきた人々のいとなみが長い時間をかけて形づくってきた景観です。

山袈の狭い谷に貫流する「裏の川」に沿って最上流が山林、上流に棚田、下流側に集落が展開し、その出入口には氏神である坂本八幡宮が鎮座して

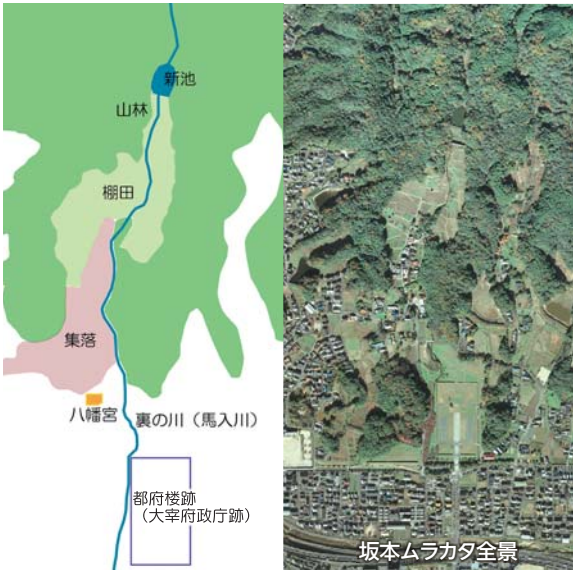
います。さらにその前面には都府楼跡の名前で親しまれている大宰府政庁跡が広がっています。

集落は10軒ほどで田畑や水路・森の手入れや、八幡宮をはじめお薬師さん、オカッテンサン（鬼子母神）や恵比須さんなどのお世話をしています。ここでは家が建て替えられたり、代替わりがあつたりしていますが、住んでいる人々が先祖から受け継いでいる里の風景、また、地域への愛情は変わりなく、周囲を森で囲まれていることもあいまつ

文化財課 城戸 康利



集落の風景(正面が四王寺山)



坂本ムラカタ全景



集落の風景(万葉の小径から)



「裏の川」上流の棚田(奥が市街地)

太宰府の文化財

333

最古の戸籍・計帳関係資料

「嶋評戸口変動記録木簡」

国分三丁目 飛鳥時代～奈良時代

市の北西部にあたる国分地区には、筑前国分寺や国分尼寺をはじめとする奈良時代の遺跡が多く見つかっています。今回、その一画で発掘調査を行ったところ、北東から南西に流れる河川の跡が見つかりました。幅は13m、深さは13m、断面形は緩い逆台形をしており、弥生時代中期～後期末から埋まり始めていました。埋



国分松本遺跡出土「嶋評戸口変動記録木簡」(赤外線)

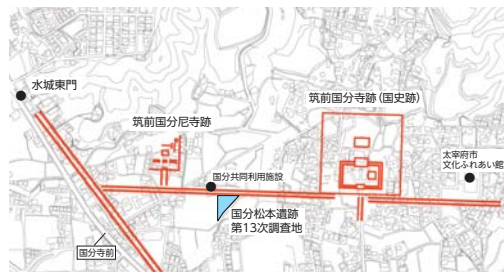
木簡10点のうち、今回は新聞でも大々的に取り上げられた「嶋評戸口変動記録木簡」について説明をします。この木簡は向かって左側と下の方は折られており、元の完全な形はわかりませんが、現在残っている部分の寸法は、縦31cm、横8.2cm、厚さ0.8cmとなります。木簡の両面には墨でしっかりと文字が書いてあり、特に裏面は文字の残りが良いです。表の右上に「嶋評」と書いてあり、ここが書き出しとなります。評とは、古代日本の行政単位の1つで地域のまとまりを指しており、「嶋評」は後の志麻郡にあたります。

これは現在の福岡市糸島市と福岡市西区周辺地域のことと考えられています。続いて、戸主(家の長) 建部身麻呂の戸(家族について書いています。文中には「建部」、「占部」、「白髪部」など多くの人名やそれらの続柄「戸主妹」や身分「進大式」、課税に関する「政丁(正丁か)」、「丁女」、軍団に関係すること「兵士」等と、戸(家)や戸の増加・減少・分割などが記載されています。川部里という地名も書いてあり、これは現存する最古の戸籍のひとつ、大宝2(702)年の「筑前国嶋郡川辺里戸籍」(正倉院文書)との関係において注目されます。

表	裏
<ul style="list-style-type: none"> 嶋評 戸主建ア身麻呂戸又附去建 政丁次得 兵士次伊支麻呂政丁次 占ア恵 川ア里占ア赤足戸有 小子之母占ア真 女老女之子得 穴凡ア加奈代戸有附 	<ul style="list-style-type: none"> 并十一人同里人進大武建ア成戸有 同里人建ア昨戸有戸主妹夜平女同戸 麻呂損戸 又依去同ア得麻女丁女同里 白髪ア伊止布 損戸 二戸別本戸主建ア小麻呂

釈読：坂上康俊(九州大学大学院教授・井上信正(文化財課)ほか

この木簡は「評」と書いてあることから、郡ではなく評が使われていた時代、つまり大宝律令以前(701年以前)の飛鳥浄御原令の段階の資料といえます。また裏面の「進



国分松本遺跡第13次調査周辺地図

文化財課 高橋 学

太宰府の文化財

334

木簡につけた木簡

国分松本遺跡(国分三丁目)

7世紀末

昨年見つかった国分松本遺跡出土木簡で、もう一つ注目されているものがあります。

これは長さ32・6cm、幅4.3cm、厚さ6mmと木簡としては大きなもので、「付け札」と呼ばれるタグの一種です。この札に内容を記し、上部の切り込みにヒモを巻きつけ、物品(あるいはそれを入れた容器や荷など)と結びつけて使われ

ました。

札の上半部には、大きく「竺志前国嶋評」と書かれています。「評」は大宝律令(701年)以前の「郡」の表記で、物品が7世紀末の筑前国嶋郡(糸島市北部・福岡市西部)に属する(あるいはもたらされた)ものとわかります。続いて「私」板が十六枚、目録板が三枚、父母方板が五枚、あ

わせて廿四(二十四)枚」と内容を記しています。この付け札が24枚もの「板」のタグということがわかりますが、その板は単なる板材ではなく、「目録板」といった記載から文字が書かれた文書の上です。つまりこれは「木簡(板書きの公文書)」につけた「木簡(付け札)」だったのです。

まず注目したいのは、公文書としての木簡が存在したと証明されたことです。中国唐を手本とする文書行政がはじめられたこの時代、記録のため木簡が使われたことは知られていましたが、付け札やメモ書きのような利用だけでなく、正式な行政文書にも使われた

ことは今回初めてわかりました。何枚もの板に記された公文書はかさばって管理が大変だったと思いますが、この付け札でさえ使用後は中央に切り込みを入れて折るという廃棄処理がなされていますので、きちんとした文書管理のルールがあつたこともうかがえます。

公文書の内容にも注目が集まっています。下半部冒頭の2文字目は「祀」「札」などに想定する意見もありますが、筆の運びから「牝」と読み、馬にかかわる文書ではないかという指摘があります。馬は軍事的に重要なものです。その帳簿なら、「私牝板十六枚」は私有されている牝馬を個々に記した帳簿、「目録板三枚」はそれらを取りまとめた目録、「父母方板五枚」は血統について記した帳簿、とも想定でき

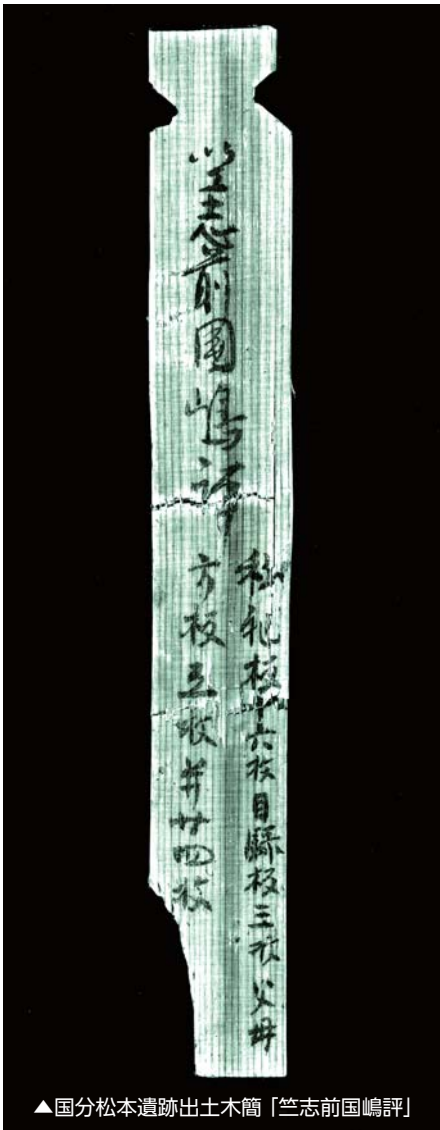
た機関についても興味深い推測ができます。書きはじめが「竺志前国」となっていますが、そもそも筑前国内でやりとりする公文書なら「嶋評(嶋郡)」からの書き出しで十分なはず。国名からの書き出しは、筑前国より上位の機関で取り扱われる性格の公文書だったことを示しています。つまり筑紫大宰府(後の大宰府)に保管された可能性があるのです。

先月紹介した戸口変動記録木簡は筑前国での処理が考えられるため矛盾するようですが、じつは後の大宰府は筑前国を兼務することがあつたことが知られています。ここで大事ななのは、そうした両者の関係を大宝律令以前にさかのぼって考える材料が出てきたという事です。知られざる筑紫大宰にせまる貴重な情報です。

このように、出土した木簡は東アジアと向き合う国づくりを進めたこの時代の歴史像を多方面にわたって切り開く鍵として、今大いに注目を集めています。

さらには、公文書を取り扱っ

文化財課 井上 信正



▲国分松本遺跡出土木簡「竺志前国嶋評」

太宰府の文化財

335

かつてあった道 四王寺山の太宰府町道 (太宰府市民遺産第3号)

市の北部に位置する四王寺山には、かつて四王寺村(現・糟屋郡宇美町四王寺)とふもとの宰府のまちを結ぶ全長約4km、高低差約280mの「太宰府町道」と呼ばれる道がありました。昭和40年代に四王寺林道ができるまでは、この太宰府町道が四王寺村と太宰府町をつなぐ重要な幹線道路

でした。

四王寺村の子どもたちは、この道を歩いてふもとの太宰府小学校へ通っていました。雨の日も、雪の日も、そして夏の暑い日も、子どもたちは毎日この山道を登り下りしていたのです。

登校途中の四王寺村の子どもたちを目にした人は、次の

ように記しています。

「崇福寺横の登山口から旧道を通って上がる途中、男女の小学生数人が旧道を下つてくるのに出会ったが、これらはこの集落の児童達で、太宰府小学校に通っており、毎日四王寺の山坂を上下しているの、とても健康そうな子ども達であつた。」(上村高直『太宰府いまむかし』、昭和47年)

このとおり、四王寺村の子どもたちは、足腰がたいへん丈夫でとても元気だったといえます。四王寺村を出て、尾花土壘のあたりに来ると、眼下には太宰府の町並みが広がります。

していたという話も聞きます。

またこの道は、四王寺村の人々が宰府のまちへ買い物や商売に出かける

生活の道でもありました。幅3m前後の山道を、スラ(※1)を引いた牛も行き来をしていました。米を売りに宰府まで下りたその帰りに、角打ちで酒を飲み過ぎた主人を、行きに米を積んで来た牛がスラに乗せて帰ったというエピソードも残っています。

こうした太宰府町道の往時の姿を伝えていきたいという思いから、四王寺山勉強会(※2)によって、平成23年1月の第1回太宰府市景観・市民遺産会議で、「かつてあった四王寺山の太宰府町道」として市民遺産に提案されました。

現在の太宰府町道は林道で所々が分断されているものの、



山中に見られる太宰府町道の名残



四王寺山勉強会の活動のようす

山中でも道跡を見ることが出来ます。しかし、藪に覆われたり、林道からの不法投棄によって荒廃していたりすると、多岐にわたる状況ではありませぬ。四王寺山勉強会では、将来的にこの道を地元の子どもたちをはじめ多くの市民が太宰府町道の歴史を感じることもできる道としての活用を目指し、草刈りやゴミ拾いといった自分たちでできるところからの活動を続けていきます。

文化財課 遠藤 茜

※1 スラ：荷物を運搬するためのソリの呼び名。スタともいう。

※2 四王寺山勉強会：文化遺産調査ボランティアの中から生まれた景観・市民遺産育成団体。



太宰府町道(赤線)
注：現在は実際にすべてを歩くことはできません

子どもたちも、ちが山の上で、太宰府駅に到着した電車を見下りて、道を見下りて、小学校まで競走を

太宰府の文化財

336

推定朱雀門礎石

観世音寺二丁目

平成24年11月2日、都府楼 いた大きな礎石が、大型クレーターの植え込みに置かれて



▲朱雀大橋横に移設した礎石

レールで運び出されまし
た。その行き先は30年前に発
見された場所に程近い朱雀大
橋横の市有地です。

この礎石は、昭和57年12月、
観世音寺土地区画整理事業に
伴う御笠川改修工事の際に、
大宰府政庁跡の真南200m
の御笠川の川底から発見され
たものです。礎石は本来の位
置を保っていませんでした
が、発見地が平城宮などの都
で言えば、朱雀門がある場所
であることから、大宰府の朱
雀門の礎石のひとつではない
かと考えられています。大宰
府に朱雀門があったという記
録は残っていませんが、都の
縮小版のように政庁や条坊が
造られている大宰府では、同
じように朱雀門が造られてい
たと推定されています。

この礎石の大きさは2.42×
1.82m、厚さ1.3m、花崗岩製で、
重さは約7.5tもある巨大なも
のでした。底の部分はやや尖
り気味で、上面は柱を据える
ための直径66cmの円形の柱座
が彫り出されています。
現在残っている朱雀門の礎

石は1個のみですが、もし、
奈良の平城宮と同じような朱
雀門が建っていたとすると合
計18個の礎石が必要になるた
め、まだ周辺に埋もれている
可能性があります。

朱雀大路を北上すると、御
笠川を渡つてすぐに朱雀門が
建っていたと推測され、朱雀
門をくぐると広場が広がり、
その両側に役所が建ち並ぶ官
庁街がありました。正面を見
れば四王寺（大城）山を背後
に大宰府政庁の朱色の建物が
建っていたことでしょう。

わずか1個の礎石ですが、
本来の位置に近くなったこと
で、古代の風景を想像しやす
くなつたのではないかと考え
ています。また、その横には
万葉歌碑も新設され、古代に
想いをはせるミニスポットと
なっています。

文化財課 宮崎 亮一



▲礎石の移設風景



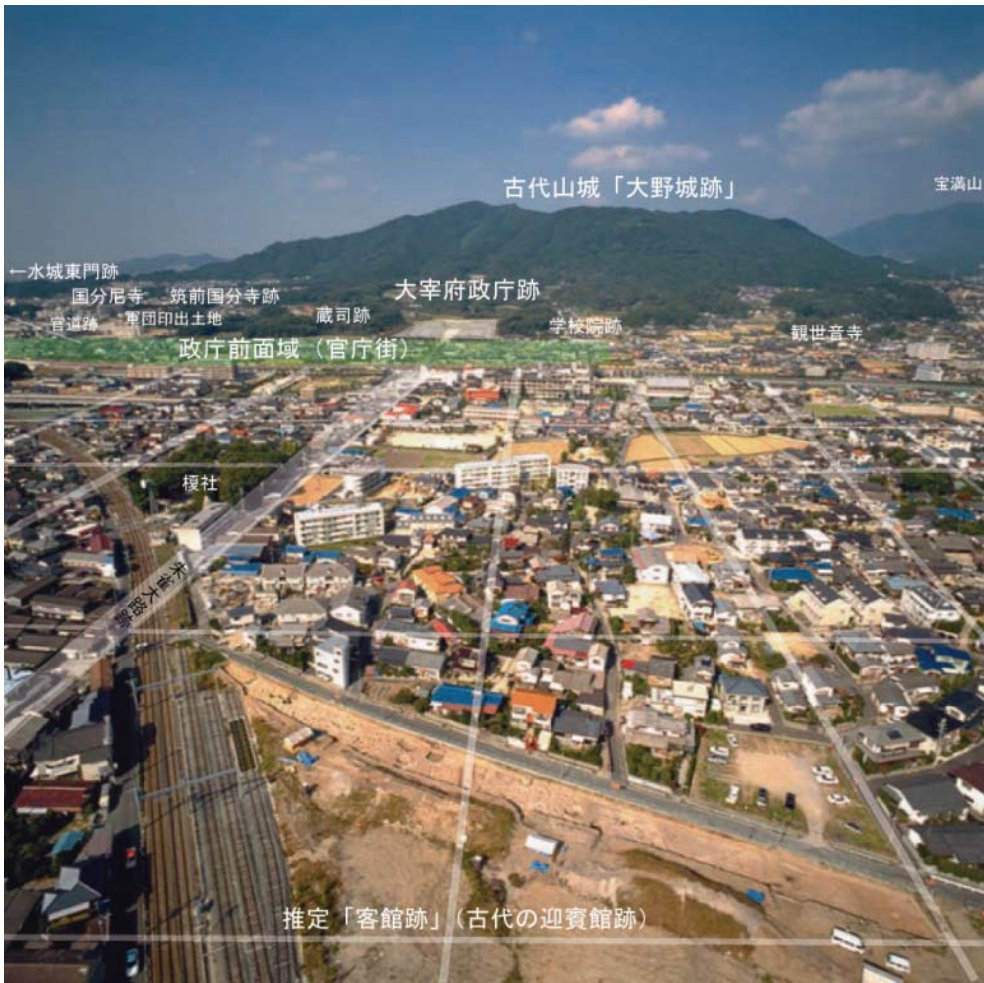
太宰府の文化財

337

古代の計画都市

山城と官衙と条坊の国際都市

観世音寺、朱雀 飛鳥〜奈良時代



太宰府市は読んで字のごとく「大宰」という宰相、つまり大臣クラスの役人が置かれた「府」(役所)があつた場所であり、まちそのものが歴史性を帯びた名前を持つ都市です。

盟国であつた日本に多くの百済人が渡来しました。その百済の遺臣達により水城・大野城・基肄城が造られ、半島に近い国家の最前線に、東アジアで展開していた都城制の手法を取り入れた壮大な施設が構築されました。古代外交は斉明天皇期以前の百済中心の外交、天武・持統天皇期の新羅との国交回復、8世紀の遣唐使の再開による唐との直接外交という流れがあり、天武朝に東西南北の都市計画道路を備えた藤原京が飛鳥に建設された背景には、新羅の首都慶州のプランが参考にされたと考えられ、704年の遣唐使帰国後におこつた平城京への遷都は大帝国であつた唐の長安城の都市プランが参考にされたといわれています。

近年の調査の成果により、条坊内には古代外交に関連する施設として外国からの賓客を招いた「客館」跡と想定される施設が西鉄二日市操車場跡地から発見され、その西側には幅約36メートルの条坊を南北に貫く中心道路である「朱雀大路」があり、朱雀大路南端の二日市から大佐野、向佐野、吉松を抜けて水城西門を経由し、福岡市の鴻臚館跡(古代の迎賓館)に至る古代官道も発見されています。まさに大宰府は古代外交の最前線に置かれた都市でした。

大宰府 大宰府の歴史はまさに日本の古代外交の歴史を前提としており、今に残された遺跡もそのことを雄弁に物語っています。朝鮮半島では600年に百済が唐・新羅によって滅亡し、当時の同

た古代中国的な都市の景観を併せ持っていました。

成27年度まで、水城跡、大野城跡、基肄城跡を共有する春日市、大野城市、筑紫野市、宇美町、佐賀県基山町と共同して、築城1350年を迎えるこれら古代の史跡を活用した事業を展開していく予定です。

大宰府の古代都市は北に大野城、南に基肄城という朝鮮半島的な山城を備えた形を採り、北の山裾に政庁が置かれ、その前に政庁に関連する官衙群、つまり官庁街があり、御笠川を隔て東西南北の計画的な道路による条坊制が敷かれ

文化財課 山村 信榮

太宰府の文化財

338

坂本ムラカタのダブリユウ

観世音寺四丁目

「ダブリユウ」は太宰府市史民俗資料編（平成5年刊）によると、旧御笠郡から筑前南部一円にかけて春・秋にお



▲現在の水神棚

▼水神棚(坂本)(市史民俗資料編 889 頁)



史跡の広場に水神棚を設け、組の皆で川を浄めて棚を拝んだあと、当番の家でお神酒をいただきドジョウ汁で食事をしました。

「駄糞流」「駄風流」（風流ふうりゅう）福岡県南地方での祭礼芸能の呼び名）などの字を当てることが考えられていますが、本当のことはよくわかりません。各所での話や記録をみると、「牛馬の厄病よけ、水難よけ」（通古賀）、「牛馬のまつり、川まつり」（向佐野）、「川祭」（五条七組「日待燈明講川祭帳」）などとされています。かつて農耕に欠かせなかった牛馬のまつりと水神のまつりが一緒になったもののようです。（市史民俗資料編参考）

昭和63〜平成3年の市史編さん室による調査では、坂本ムラカタは春秋2回、組の当番が坂本八幡宮の東南にある

より土盛も発掘されましたが、井戸も鏡も出てきませんでした。現在の組は4軒となり、春に、かつての場所近くに再現した土盛りのうえで行っていきます。



▲お供え

お供えもご飯はわらで編んだ腕に入れていたものが折敷となり、わらに刺したドジョウなどの川魚はイリコに変化しています。二つの竹筒をわらでつないで作るお神酒入れは、二対から四対へ増え、八幡宮ではかつてから供えている猿田彦さまだけでなくガラんさまにもお神酒をあげるようになっていきます。平成の初めころは市内各所で農家の欠かせぬ行事として行われていましたが、現在は多くが途絶えてしまっているようです。

文化財課 城戸 康利

太宰府の文化財

339

翡翠の原石

御笠団印出土地周辺遺跡(坂本) 8～9世紀

昨年、筑前国府にかかわる木簡などが出土し、話題となった国分松本遺跡。その東に「御笠団印出土地」という遺跡があります。

昭和2(1927)年、桑畑を耕作中に「御笠団印」と彫られた銅印が見つかりました。この一帯の旧地名「御笠」の名を冠した古代の軍団「御笠団」の印章です。軍団とは、律令制のもと諸国におかれた一団千人ほどの軍事組織で、各国内から健康な成年男子が



兵士として徴発され、配属されました。国分松本遺跡の木簡にも「得□□(得万呂?)兵士」とあり、兵士徴発を示す最古史料と注目されたことは記憶に新しいところですが、また水城小学校敷地内からも明治32(1899)年に「遠賀団印」が出土しています。記録によれば筑前国には4つの軍団があったようですので、実にその半分が坂本付近にあつて、筑前国府や大宰府を守っていたと考えられます

(これらの印は国の重要文化財となり、東京上野の東京国立博物館で展示されています)。

軍事組織といえども一つ、大宰府には辺境防備のための「防人司」がありました。664年水城築堤とともに集まった防人制度によって、関東地方など東国からたくさんの人々が筑紫へ駆り出されたことを、史料、また万葉集・防人の歌は伝えていきます。ただ出土品では、防人にかかわるものや、防人が東国からもたらしたものはほとんど見つからないのが現状です。そうした中、興味深いものが御笠団印出土地近くの古代の地層から発掘されています。濃い緑色をした翡翠です。大きさ3～4cmと小さなものですが、比重が大きいため手に持つと見た目より重く感じられます。表面は平滑ですが、人工的に手を加えたものというよりも、河原で拾われた石のような印象をうけます。

中国で古来より珍重された翡翠と呼ばれるものには、

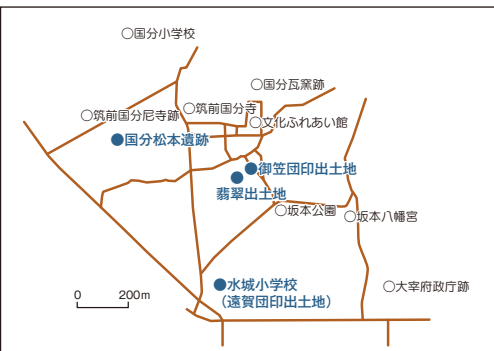
「軟玉」と、現代も宝石として扱われる「硬玉」の、鉱物学的に異なる2種類がありますが、科学分析の結果、これは硬玉と判明しました。硬玉は世界的にも産地が限られており、日本の遺跡から出土するものは新潟県糸魚川地域が唯一の産地として知られています。その多くは白色で、このように緑色が濃いものは珍しいようです(以下、硬玉のことを翡翠と記します)。

日本で翡翠は古くから珍重され、縄文時代から古墳時代には勾玉などに使われました。ただ、見た目が翡翠と同じ緑色をしていても分析すると翡翠ではない場合も多いようで、素材よりむしろ色が日本人に好まれたのでしよう。緑色は、後の奈良～平安時代にも瑠璃瓦・奈良三彩・緑釉陶器といった高級品にも使われていますが、さまざまな色の「玉」が珍重されたこの時代、翡翠は全く使われなくなり、緑色の「玉」の素材はガラスや蛇紋岩に代わります。翡翠が割れにくく(韌性が大

きく)、加工が難しいこともあるのでしようが、この時代の流行(大陸文化の影響)もその理由かもしれません。そうした時代、軍団にかかわる場所に、なぜ東国産の、しかも緑色をした上質な翡翠の原石が持ち込まれたのでしょうか。持ち主はどんな思いでこれを持っていたのでしょうか。

詳しい背景は何もわかりませんが、ふるさとを想う東国の防人のことや、防人と筑前国の軍団との関係などを想像させる、そんな遺物として紹介しました。

文化財課 井上 信正



太宰府の文化財

340

草文双鳥鏡

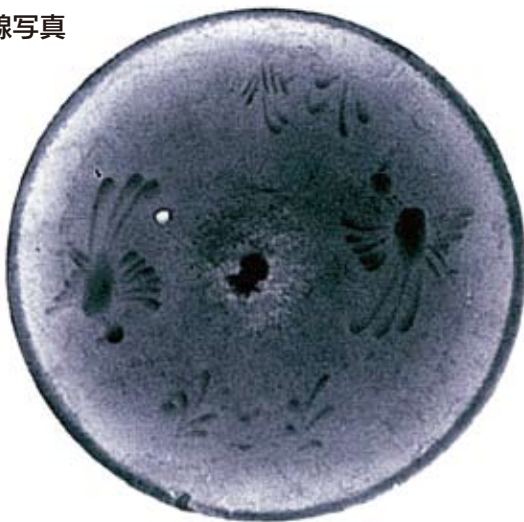
観世音寺五丁目 12世紀前半〜中頃

四王寺山の南裾に朝日山と
呼ばれている小山がありま
す。東側に朝日地蔵があるこ
の山を平成12年度に発掘調査
すると、山頂にお墓が見つか
りました。墓からは埋葬され
た人と共に埋められたもの
(副葬品) が出土しました。
副葬品の中で注目されるの

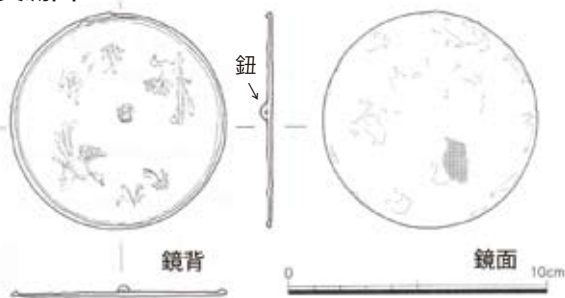
草文双鳥鏡(鏡背面)



X線写真



鏡実測図



面の形で見るとややつぶれた
三角形をしています。このよ
うな特徴は中国、宋の時代に
作られた中国鏡によく似てい
ます。次にデザイン(絵柄)
を見ると、中心にある鈕を中
心にして上下を反転させた鳥
の文様を、対角線上に配置し
ており、鳥の文様の間には草
花の文様をあしらっています
す。そのため、草花の中で2
匹の鳥が舞っているような構
図に見えます。

鏡を日本は10〜11世紀にかけ
て輸入しています。その後、
日本では11世紀後半から12世
紀前半に中国の宋鏡的なつく
りに鳥の文様を表した日本製
の鏡が大流行します。このよ
うな鏡の様式は、宋鏡式と呼
ばれており和鏡の祖型の1つ
として考えられています。宋
鏡式の流行は12世紀中頃まで
見られます。その後の鏡は、
圏線を持ち、周縁が垂直もし
くは外反気味に立ち上がる形
が定着して、いわゆる和鏡と
呼ばれる形となりました。以
後、中世の間はこの鏡の形が

現在、太宰府市文化ふ
れあい館では、大宰府の
歴史の「始まりから現在」
まで、まるごとわかると
好評の「まるごと太宰府
歴史展」を開催中です。
(11月4日まで) 皆さん、
ぜひご来館ください。

文化財課 高橋 学

使われていきます。
朝日山の墓から出土した草
文双鳥鏡は、進んでいる外国
の文化・技術をうまく取り入
れて、日本独自のものを作り
出していく過程を学ぶことが
できる貴重な資料です。

